障害のある人・ない人が共に理解し合えるまちに

東京パラリンピック出場　車いすラグビー・長谷川選手インタビュー

昨年８・９月に開催され、日本中が熱狂した東京2020パラリンピック。
今回、車いすラグビーに日本代表として出場した、広島県出身の長谷川勇基選手にお話を伺いました。
けがによる受傷で胸から下の感覚がない状態でありながら、「だめならだめでいい。自信をもってまずはやってみる。」という気持ちで色々なことにチャレンジしている長谷川選手。
障害の有無に関わらず誰もが過ごしやすい社会を実現するために1人ひとりができることについて、インタビューを通して考えます。

問社会福祉課（☎0848－38－9124）

profile

長谷川（はせがわ） 勇基（ゆうき）

1992年10月５日（29歳）
出身地　広島県広島市
クラブチーム　BLITZ
所属　ソシエテ･ジェネラル証券BLITZ

▽けがについて
高校３年生の夏休みに海岸で転倒し、頸髄を損傷
受傷後、１週間でリハビリ開始、１年後には退院し、車の免許取得や大学へも進学する

▽戦績（日本代表）
2019年 ９月　2019 IWRF アジアオセアニアゾーン選手権大会　準優勝
2019年10月　車いすラグビーワールドチャレンジ2019　３位
2021年 ８月　東京パラリンピック出場　銅メダル

Q 高校３年生のとき、けがをして障害を負い、歩くことができなくなったとのことですが、そのときの状況を教えてください。

A 高校３年生の夏休みに友達と海に遊びに行き、浜辺で転倒しました。目が覚めた時には、胸から下の感覚がなく動けない状況で、けがをした翌日にドクターヘリで九州の病院に運ばれ手術を受けました。医師から「もう歩くことは出来ない」と言われ、先のことを考えるとショックを受けましたが、「しょうがない。頑張るしかない」という気持ちになり、１週間後にはベッドから起き上がれない状態でリハビリを開始しました。今思うと、気持ちの切り替えは早い方だったのだと思います。
両親は、けがをしてすぐの頃は心配して側に付いていてくれましたが、２～３カ月すると過保護にしては自立のためにならないと、厳しく接するようになりました。一方でまた、右も左もわからない自分のために情報をリサーチし、自分に合ったリハビリテーション施設を見つけてくれました。両親にはとても感謝しています。

Q 受傷後、県外の大学へ進学し１人暮らしをされていたそうですが、大学生活はどうでしたか？

A リハビリ施設へ入所中に大学進学を勧められました。障害のある自分が生きるために必要なことを学べると思い、社会福祉学部へ進学しました。
入学からしばらくは母と一緒に下宿先に住んでいましたが、入学から２カ月ほど経ち友達も増えた頃、母は広島に帰り、そこから本格的な一人暮らしが始まりました。
１年生の時は、週３～４日、掃除や炊事、お風呂の介助をヘルパーさんにお願いしていましたが、友達が増えると泊まりに来た友達が色々と協力し助けてくれるようになり、徐々にヘルパーさんへ依頼する時間が減り、大学４年生になる頃には週１日１時間だけの利用となっていました。
こうして生活していく中で、生活の知恵、体力がついていったと思います。大学時代はとてもいい思い出です。

Q 車いすラグビーという競技をはじめたきっかけを教えてください。

A 高校時代、リハビリ施設に入所していたときに、日本代表選手の練習を見学したことがきっかけです。本当に障害があるのかと思うぐらい迫力のあるタックルを見て「おもしろそう」と感じ、「運動のためにやってみよう」と思い、すぐに競技を始めました。それから今に至るまで、車いすラグビーを続けてきました。
この競技の魅力は、ぶつかりあう音や迫力です！また、性別や年齢に関係なく、一緒になって楽しむことができ、今の時代にあったスポーツではないかと思います。
私は障害が重くスピードに追いついていけませんが、相手選手の動きを止め、味方の道を作る役割を担っています。
そのため、頭で先読みしながら動くようにしています。

Q 東京パラリンピックでのエピソードをお聞かせください。

A 大会前日のミーティングでは、チームメイトと「日本らしい自分たちのラグビーをしよう」と話をし、自分たちには何ができるか、どう表現できるかを意識してプレーしました。
大会では選手12人の力だけでなく、監督や車いすのタイヤがパンクした時、瞬時に修理するメカニックの存在が欠かせません。多くのスタッフに支えられONE TEAMとして戦うことができ、銅メダルを持って帰ることができました。とても嬉しく思っています。
また、選手村はすべてバリアフリーで、すべての人が過ごしやすい理想的な環境でした。選手村以外でもこの環境が広まればいいなと思います。

Q 最後に、尾道の皆さんへメッセージをお願いします

A 指も動かない、胸から下の感覚がない私でも、メダリストになることができました。私は何かを始めるとき、「障害の有無に関係なく、まずは自信を持って何でもやってみる。駄目ならそれでいいじゃないか。」という気持ちで取り組んでいます。また、車いすラグビーを通して「できることは自分でやるべきだが、できないものはできなくていい。助けてもらえる人がいるのだから、頼んでやってもらい、お互いが気持ちよくなれば良い。」という考え方を教えられました。
このインタビューを通して尾道の皆さんへ、挑戦する気持ちと、助けを自ら発信する勇気をお伝えできれば良いなと思います。
今後は、選手人口を増やしていくことにも力を入れていきたいと思っています。そしてパラリンピックの熱をこのまま終わらせることなく、いつか広島でイベントができるよう頑張ります！

障害のこと知っていますか？理解を深めるパンフレットを作成しました

障害には、身体障害・知的障害・精神障害・発達障害など、さまざまな種別があり日常生活や社会生活を送るうえでさまざまな「ハンディ」があります。また、見た目ではわからない障害もあり、障害の正しい理解がされていないために、生活に支障をきたす場合もあります。障害の特性や特性に応じた必要な配慮について正しく理解することが、あたたかい社会を築き、「すべての人が地域で一緒に暮らす」ことへの第一歩になります。
さまざまな障害について、例とともに紹介するパンフレットを、尾道市地域自立支援協議会権利擁護部会が作成しました。社会福祉課、各支所、公民館などで配布しているほか、市HPで掲載しています。